

2021年度言葉の森くるめ連続講座  
第1回「聴こえない子も聴こえる子も同じ子ども」  
—質問に答えて—

南村 洋子

Q1.インテグレートする児童が増えて聾学校の児童数が少なくなり、なかなか集団での活動が厳しい聾学校の状況があります。個に合わせた指導はしやすいですが、学び合いとなると難しい状況もあります。聾学校の学びの場がいいと考えつつも友達の多い地域の学校を求める親子に対しての支援はどうすればよいでしょうか。(学校関係者)

A1.聾学校が聴こえない・聴こえにくい子どもたちにとってなぜ良いのでしょうか？

それは子ども同士が完璧に理解し合える環境だからです。互いに分かり合えるまでコミュニケーションできる環境(時間と場)が保証されているからです。しかし、友達の数が少ないという現実があります。それでは友達の多い地域の学校に通学すれば良いのでしょうか。否です。友達の数は増えても聴こえない・聴こえにくい子どもの周りには友達はいません。きちんといつでもどこでもコミュニケーションが取れる相手は残念ながら見当たりません。1対1のコミュニケーションが不可能なものですから、周囲からの確実な情報はほとんど入ってこないということです。聴こえにくいお子さんも騒音化の教室や校庭などでは同じように耳からの情報はほとんど入ってきません。

また、学習においては何かおかしな点や音などがあります。インテグレートしたお子さんの参観に出向き、担任の先生にお尋ねするとほとんどの先生が「授業中、つい聴こえない・聴こえにくい児童がいることを忘れてしまいます。」といわれます。親でもつい後ろから音声言語で話しかけてしまう現実があるのですから、担任の先生を責めることはできません。こうした中で子どもは唯一見える視覚をフルに生かして周りと同じ行動をしようと努力しています。しかし、それにも限度があり最後には友達とのコミュニケーションを放棄したり、授業中の先生の話が理解できず、手遊びをしたり、ボーと窓の外を見たり、空想の世界に遊んだりしているのが現状です。私の娘は先生の話が分からないので、授業中ほとんど教科書以外の本を読んでいたといっていました。

最近では、聴力40dB前後のお子さんでも聾学校を選択するようになりました。その理由は、生まれてすぐに聴こえにくいことが判明し聾学校の乳幼児相談で「聴こえにくい」とは何ぞやということを徹底的叩き込まれて、親御さんの頭のどこかにわが子の聴こえに疑いを持った親御さんだからです。聴力40dBですから親御さんも懸命に努力されてきれいな音声言語を話す子どもに成長していきます。すると日々の生活の中でつつい流されて、後ろからあるいは遠くから声掛けをしてしまいます。その都度、私たちは親御さんの子どもへの接し方を「聴こえない」子どもに接する態度に改めるようアドバイスします。こうした日々の積み重ねの中で「わが子は軽・中度難聴あるいは人工内耳装用児でも聴こえない子どもなのだ」と認識していくわけです。

親御さんは子どもの「きこえ」について徐々に理解し、子どもの立場に立てるようになれば聾学校がわが子にとって欠かすことのできない居場所だと考えられるようになります。たとえその場所には友達がいず自分一人であっても分かる環境、担任とあるいは上級生・下級生とのコミュニケーションが完璧にできる場であれば子どもは満足します。家庭に帰れば聴こえる親や兄弟がいてそこでいくらかでも聴こえる人とのやり取りを学ぶことができます。周りは聞こえる人であふれているのですから不自由はしません。そこで不満足なコミュニケーションを経験しても、聾学校では100%分かる手話を使ってコミュニケーションしたり、学習できるわけです。そこで子どもは辻褄を合わせているのです。

もっとお友達が多いほうが良いと考えるのは、聴こえる人間の立場での物言いではかありません。真の意味で子どもの立場に立てばそのようなことは言えないはずです。ましてやまだ幼い小学校・中学校の子どもに対してインテグレートを勧めるのは酷です。

それは私自身の苦い経験から出た思いであり考えです。娘をインテグレートさせた時のことを思い出すと今でも涙が出ます。あの頃、私は「聴こえない・聴こえにくい」娘の立場にまったく立てない親でした。これから「聴こえない・聴こえにくい」お子さんを育てる親御さんたちには私のような後悔をしてほしくありません。殊に子どもが幼い時代は親も子ども毎日が楽しく幸せな思い出を作っていたいただきたいと思います。

**Q2.**今後、国による大きなインクルーシブ教育の流れの中で、聾学校が生き残っていくための最も重要な課題と解決策は何でしょうか。(学校関係者)

**A2.**インクルーシブ教育の目的は経済的なことが大きいと思います。国は、同じ敷地内で同じように教育をすることで、経済的な負担は大いに軽減されると考えていることです。異なる障害を持つ子どもたちを同じ環境に置くことで、平等に扱っているという考え方には賛同できません。それはとりもなおさず個々の障害を正しく理解し、個々の子どもの立場に立っていないということです。

養護学校の子どもの数が増えて学校の増設があちこちで聞かれます。このことは決して個々の子どもにとって養護学校が必要かつ適しているという観点からではないように思います。数のみを見て学校の増設を行っているのではないのでしょうか。聴覚障害児を考えると「聴こえない・聴こえにくい」とは具体的にどのようなことなのかを正しく理解し認識していけば、聾学校の存在意義はおのずと生まれてくるはずです。

「聴こえない・聴こえにくい」子どもと他の障害を持つ子どもの明らかな違いは、二次障害としてコミュニケーション障害があることです。このことは「聴こえる」人間には理解しがたいことです。そのうえその障害について本人が説明できないということがあります。例えば「分からない時には質問しなさい」という言葉は禁句です。なぜなら何がわからないかを特定して説明したり伝えたりできないからです。殊に幼いときはわからないままに時間が過ぎていくのです。100歩譲って、ほかの障害の場合はほとんどの場合、聞こえ

るのでコミュニケーションが成立したり、自分の意思を伝えたりできます。したがって、異障碍児同士でも集団教育はある程度可能だと考えられます。とはいっても個々の障碍に合わせた教育は必要だと考えます。

しかし、教育にお金をかけない日本の政府は学校教育に人も物も環境もお粗末なままにしてこれまで来ました。子どもの数が減り出生率が下がった今ようやく30人学級が一般的になってきました。

こうした中で私たちが子どもたちにとって聾学校が欠くことのできない存在であることをPRするには、まず親やかかわる教育関係者がその必要性を声高に言うことだと思います。そのことを前提にしてアイデンティティを持った子供たちを育て、本人が積極的に聾学校の存在意義を主張することだと思います。

先の見えない遠い目的に向かって歩いている私たちですが、草の根的に理解者を増やし、聾学校が子どもにとって最適な場であることを大学の研究者と現場の人間が連携して証明していくことだと思います。教育は結果が表れるまで長い時間を要します。故に人事異動の問題や管理職の資質の問題、大学の教員養成問題など言い出すときりがありませんが……。

**Q3.** 地域支援の中で、また聾学校の中でも、軽・中度のお子さんの障碍認識の難しさを感じます。年齢的、また精神的な発達段階にもよると思うのですが、どのタイミングでどのような支援が必要なのか。地域支援の場などで単発的なかわりの場合にどのようにメッセージを伝えたいのか。何かいい方法があればアドバイスをお願いします。

**A3.** 軽・中度難聴児の障碍認識はとりもなおさず親御さんの障碍認識と連動していると思います。乳幼児から親御さんがわが子にどのようにかかわってこられたかを検証する必要があります。また親御さん以外の人たちのかかわり方も大きく子どもの障碍認識に影響していると思われれます。例えば「きれいに発音できたね」「今、聞こえたのね、すごいね！」などの聴こえや音声に対する評価は禁物です。どのような手段を用いても互いにコミュニケーションが取れた時に「あなたの伝えたいことがよくわかったよ！」「私の考えがわかってもらえてうれしいよ！」といった評価が必要だと思います。聴こえや発音に特化した評価をしないことです。

子どもの障碍認識は周りの人たちが育てていくものです。まず、子ども自身が「私は今の私で十分である」という視点に立つことから始めることです。耳を澄ませて聞く努力をしたり、発音練習に時間をかけたりするよりは、子どもが自然に使える手段（例えば手話や筆談）で確実なコミュニケーションをとることで、子ども自身は「自分は手話を使えば何でも理解できる」「筆談をすれば十分理解できる」いわゆる聴こえにくいことで困ることはないのだと聴こえにくいことをマイナスに考える必要がないことを自覚します。

逆に聴こえにくいから「手話」や「文字」などの視覚的コミュニケーションを使いたいと思える子どもになってほしいものです。

## 追加質問

Q1. 聴覚の活用と手話の併用について、殊に0歳から手話をいれていく場合の聴覚活用への配慮など、具体的にどのような入れ方、配慮をされているのか（学校関係者）

A1. 今は新生児聴覚スクリーニング検査が一般化し、生後数か月から聾学校の乳幼児相談を訪れる親子が珍しくない時代になりました。そうした親子が聾学校の乳幼児相談で初めに目にするのは、1歳児の子どもと親が手話と音声言語を用いて楽しく聴こえる子供と変わらないコミュニケーションをしている様子です。手話と音声で「○○ちゃん、次は何する?」「ボール」「そう、ボールで遊びたいの?」「うん、ママも一緒にやろう」といったやり取りを目の当たりにします。その様子を見て聴こえない子どもと通じ合えることに感激し、納得してほとんどの親御さんは手話を学ぼうと思われるようです。親の願いは、手話だ、音声だということは二の次で、まずは子どもと通じ合いたいということなのです。そのための努力は惜しまないのが親です。

親御さんへの手話学習の機会は頻繁に設けています。日常生活で常に手話を用いて子どもとコミュニケーションをとることを奨励しています。親御さんたちはわからない手話は、メモして次の来室日にろう者や担当者に尋ねて覚えていきます。それらの手話は日常的に子どもと使う手話ですから、ほかの親御さんたちともシェアしています。こうして子どもが1歳のお誕生日を迎えるころには親御さんたちは手話で会話ができるようになっていきます。手話を使うときには聴こえる親御さんたちがほとんどなので、音声も同時に発しています。したがって手話は日本語対応手話です。子どもは聴力の程度に応じて子ども自身が音声も習得していきます。しかし、音声が出たからといって手話を外してコミュニケーションすることはありません。なぜなら、軽・中度難聴はほとんどの場合聴力が低下します。また人工内耳装用児も外せば全く聞こえなくなり、騒音下では聴こえは劣り100%理解することが難しくなります。したがって、視覚的なコミュニケーション手段は乳幼児期から必須となります。ましてや人格形成の一番重要な時期に100%分かる経験が乏しいのは問題になります。子どもは100%分かる経験をすることで、分からないことが分かるのです。

聴覚活用が一番大事だと考えているのは、聞こえる教育者と聴こえる自分中心の考え方の親のみです。聴覚が活用できれば便利なこともありますが、そのことがマイナスになることも多々あります。殊に大人になって周囲の理解が得られず引きこもりや当社拒否になった子どもたちの大半は聴覚活用者です。私の教え子たちの様子からもそのことははっきりしています。早くから「自分はろう者です。音声は使えません」と宣言した子どもたちはうまく社会に適應しています。結局音声は聞こえる人に対するサービスなのです。なぜなら子どもたちにとって自分の発した声は明瞭には聞こえていないのですから。

「聴く」ことや「話す」ことに多くの時間を費やしたり、イライラしたり、どうして自分はママやパパみたいに聞こえないのだろうと悩んだりせずに、乳幼児期から手話を用いて分かる経験をたくさんして、自分の夢を持ち自分に自信を持った子どもに育ててほしいものです。